

全電源喪失の記憶

証言 福島第1原発

10

■ 第3章「制御不能」

) 14年(平成26年)5月28日(水曜日)

ア版

「1、2号機で放射線量が上がっています。全面マスクを着けてください」。福島第1原発5、6号機の運転員井手愛里(28)は3月12日午前4時ごろ、中央制御室近くの仮眠室で同僚からそう声をかけられた。事故対応が長期戦になることを見越して交代で仮眠することになつたが、余震が続いて眠れなかつた。

「1、2号機の状況ってそれまで詳しく聞いてなかつたんですけど『やばい状況になっているんだな』と思いました」

制御室内は5号機側の照明が消え、6号機側だけがついていた。5、6号機の非常用ディーゼル発電機5

たった1人の退避



東京電力福島第1原発5号機
6号機 2月

悔しさで涙止まらず

ところが免震重要棟の緊急時対策人にはみ寄つてマスク越しに声をかぶつて大騒ぎになつた。事故対応に追いつかれて大騒ぎになつた。事故対応に追いつかれて大騒ぎになつた。事故対応に追いつかれて大騒ぎになつた。

本部では井手が残つていることを知った。指示が出ちゃつたから先に井手が制御室にいることは悪いもしなかったのだ。5、6号機を担当する第2発電班長の国頭晋(48)も驚いた。「井手は妊婦だぞ。早く退避せろ!」

井手は防護服を着て制御室を出た。振り返らなかつた建屋を見て迎えの車が止まつてゐるのを見た時、涙がこみ上げてきた。

「井手は妊婦だぞ。早く退避せろ!」

敷地内では、1号機の炉心溶融がつていなかつたが、井手は制御室に入ると念のため全面マスクを着用した。後輩の補機操作員たちもマスクを着けていた。

原子炉耐圧試験中だった5号機は5号機の被ばくが限度だ。

金電源を喪失している。一刻も早く国頭から連絡を受けた当直長が井手に命じた。

「迎えの車が来る。免震棟に行つてくれ」

おなかには妊娠4ヶ月の赤ちゃんがいたが、井手は運転員として最後まで残ること決めていた。

当直長の命令にあらがうことばで手は肩を震わせて泣き続けた。

(敬称略。年齢、肩書きは当時。共同通信 前田有貴子)

基のうち、地下にあつた4基は津波で使えなくなり、地上の別棟にあつた6号機の1基だけが被害を免れた。

また5、6号機建屋内の線量は上がつていなかつたが、井手は制御室に入ると念のため全面マスクを着用した。後輩の補機操作員たちもマスクを着けていた。

敷地内では、1号機の炉心溶融がつていなかつたが、井手は制御室に入ると念のため全面マスクを着用した。後輩の補機操作員たちもマスクを着けていた。

原子炉耐圧試験中だった5号機は5号機の被ばくが限度だ。

金電源を喪失している。一刻も早く国頭から連絡を受けた当直長が井手に命じた。

「迎えの車が来る。免震棟に行つてくれ」

おなかには妊娠4ヶ月の赤ちゃんがいたが、井手は運転員として最後まで残ること決めていた。

当直長の命令にあらがうことばで手は肩を震わせて泣き続けた。

(敬称略。年齢、肩書きは当時。共同通信 前田有貴子)